オリカルクムの記憶

三　鉱物学者　ラウレンス

峯村　明

オリカルクムの記憶 3

登場人物
鉱物学者ラウレンス
021.
022.
023.
024.
025.
026.
027.
028.
あとがき
奥付

登場人物

竜門渕　めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者　１５歳
竜門渕　遠野	竜門渕家の現在の当主　めるのの曽祖母
河合　保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ　１４歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A.V.ラウレンス	ベルギー人の旅行者
おシゲ /　源三	竜門渕家の使用人

鉱物学者ラウレンス

021.

　おシゲがいそいそとお茶うけを運んできた。
「さ、甘いものをおひとつ。ささ、かわいやさんも、ぼっちゃんも、遠慮なさらずに、ね」

　ラウレンスはまじまじとその、『甘いもの』を見つめ、立ち上がりかけたおシゲに質問を浴びせた。このぷよぷよしたものはなにか。まぶしてある粉状のものはなにか。原材料は。製造方法は。
　ぷよぷよは寒天といって材料は海藻、白い粉のようなものは氷餅を砕いたもので、その作り方は……
　ラウレンスは手帳を取り出して聴いたことを書き留め、スケッチまで始めた。だが、その手早いこと。一同、呆れるというより感心して彼の仕事ぶりを眺めた。

「えーと、話がちょっと横道にそれましたね」ラウレンスがひと仕事のあと、またたく間に立ち直ったのを見て、保ノ助は後ずさりしたい気分になってきた。
（なんだか、ついていけねーなーもう。なあ、おれらは引きあげてもよくね？）、とおやじの袖を引っ張ってみるが、熱心にお茶うけを味わっているおやじは気がつかない。

「えーあーそうそう、尾川商店の話でしたね、廃墟になったお店を途方に暮れてながめていたら、近所の人が通りかかり、店が倒産して肝心の尾川店主は病死、奥さんと子どもは引っ越していったが行き先はわからない、そう教えてくれました。さすがにがっく

りきましたがめげてはいられません。十七年前に湖底から石器が出土した時に、どなたか、尾川さんといっしょに仕事した人を知りませんか、と尋ねると、

『ああ……あの時分な……』
　とその人は担いでいた鍬（くわ）を降ろして考えてくれました。
『そうさなあ、なにしろ、やたらめったら人が湧いてなあ、なにせ、こんな湖からきらきらした石がざくざく出たもんでな、ここらじゃみんな、宝の山か！　て目の色が変わったわな。んだが、あの黒曜石ってのは、その辺の山掘りゃごろごろあって、大した価値はないんだって？　そしたら、みんなすうーっといなくなっちまった。
　それでも、町の教育委員会だのなんとか研究会だのじゃ、いまだ標本並べてああでもないこうでもないやってるみたいだが、おらたちにはさっぱりだし、なにがおもしれえんだか。
　あ、標本ていやあ、尾川の旦那といっしょに湖さらって、いっしょうけんめい標本つくってたのがいたわ、星名、っていうんだよ、星名千介』

　ホシナ　センスケ？

　その名を聴いて、私はびっくりして腰を抜かすところでした！

　ホシナ　センスケ！

　聴いたことがあります！　神保博士の手紙に、一度だけ、その名が出てきたのです。水つ早湖調査の時に作業を手伝ってくれたとかで、少々変わった男だけれど、彼にはものごとの本質を見抜く目があると、神保博士はそのひとのことをたいへん買っていましたっけ。

022.

「星名千介か……」

「あれ。遠野さん。もしやご存知なんですか」

「……ご存知もなにも、ありゃ、わしの教え子じゃ」

「ほ、本当に！？」
　のんびりとお茶をすする遠野にラウレンスはせっついた。「そ、そうだったのですか。教えてください、どんなことでも！」

「昔の話よ。千介が子どもの時分、面倒を見てやったことがある。幼少時に両おやを亡くして親戚の家で難儀しておったが、勉学したいというのでな。立派な心がけじゃ！
と褒めたら目を輝かせおったので、読み書き計算、教えてみたが……まるで頭に入らなんだ。だが、学校へ行きたいと言う。かたや、養い親は、うちは貧しい農家でほかに子どももいる。千介だけ学校へやるわけにいかんと言う。わしはしばらくうちで預かり、決心が変わらんのをみて、出世したら返せと言って、学費を立て替えてやった」

「まあ。おばあさま。初耳ですわ」

「何十年も前の話じゃわい」

「で、立て替えた学費、返ってきたんですかい？」

「……うむ、何年もかけてな。律儀で真面目な男じゃった」

「律儀で真面目な男……？」

「なんじゃ、なんか文句があるのか？」

「あーいえいえ。その、農家のおじさんがいうには、なんでも、たいへん変わった人で……大新聞をにぎわせたこともあるとか」

「新聞社が日本全国から奇人を募ったというやつじゃろ？　募る方も募る方なら、応える方も応える方じゃ！　そんなもんに応募するから奇人扱いされるんじゃ！」

「それはそうかもしれませんけど。遠野さん、どこへ行けば彼に会えますか？」

「……会ってどうする？」

「お願いです、彼がどこ住んでいるか、教えてください！　ご存知なんでしょう？」

　ずずいと膝をつめてくるラウレンスをわずらわしそうにながめて遠野はしぶしぶ白状した。
「……千介は、アシダ村に住んどる」

「アシダ村！　そこは遠いんですか！？」

「中山道沿いの宿場じゃ。近いっちゃあ近い、遠いっちゃあ遠い。なにせ、中山道随一の難所っちゅうワダ峠のむこうじゃからな。じゃが、人の行き来はあるから道を踏み外さなければちゃんと行き着く」

「あ、ありがとう！　遠野さん！　やっぱり良い方ですね！！」

「やっぱりとはなんじゃ！！」

「アシダ村に行けばすぐ会えるでしょうか！？」

「会えるじゃろて。なにしろ奇人で有名だから居場所を捜すのは簡単じゃ」

　感激したラウレンスは「お礼にステキな肖像画を描いてさしあげましょう！」と約束し、遠野はとくに拒まなかった。

　なんだかなー、と保ノ助はなかば呆れていた。なんだかんだいって、このヒトたち、気が合うんじゃねぇの？

023.

　それからしばらく梅雨のはしりの雨が続き、ラウレンス氏の準備が整い、保ノ助を伴ってアシダ村へ出発したのは、一週間後の月曜日だった。

　保ノ助の同行は『かわいや』の提案だった。地理に不案内な外国人旅行者に、急病、ケガ、道標が判読できない等々、道中なにが起こるかわからない。
「おめえ、父ちゃんのかわりに先生のお供をしてお役に立ってこい」と言うのだった。

　ラウレンス氏がなにがしかの学者らしいということは皆うすうす分かったのだけれども、遠野の追求にもめげず、にこにこと、「画家ということにしといてください」と言うので、皆は受け入れた。とくに、宿代を前金で受け取っている『かわいや』は。

　保ノ助が同行すると聞いて、めるのもいっしょに行きたがったが、「あいならん！！」と遠野に却下された。「山ん中で野宿することになるやもしれん！　人の耳に入ったら嫁の貰い手がなくなる！　ぜったいダメじゃ！」
　めるのは、おばあさまってけっこう保守的なのよね、と思ったが、山中の野宿はさすがにぞっとしたのでそれもそうだと引き下がった。

＊

　さて出発の朝。ラウレンス氏は街道沿いの神社にまず、立ち寄った。「道中の安全を祈願するのです」という。準備の一週間の間にこの神社の謂れからなにから、すでに下調べ済みであった。神社といったら初詣とお祭りの時に行くもんだという認識の保ノ助だったから、これこれこういう神サマが祀られているのだときいても、まるでぴんとこ

ない。さらにラウレンス氏の頭の中には街道の地図もちゃんと入っているようだった。保ノ助は己の不勉強と不案内がだんだん不安になって来た。親父は「役に立ってこい」と言ったが、役に立てそうもないどころか、かえって邪魔になりそうな気がしてきた……昨夜までは小旅行にウキウキしていたのに……

　そんな保ノ助の心中をよそに、ラウレンス氏は大きく深呼吸を繰り返し、「ああ……！」と感嘆の声をあげた。「こんなにすがすがしい場所を、私はほかに知りません。保ノ助、水つ早湖といい神社といい、こんなに気持ちのいい場所で暮らしているあなたは、しあわせです」

「そ、そうですかねい」

「そうですとも」ラウレンス氏は楽し気に笑った。「住んでいると、わからないかもしれない。でも遠く旅して来た私にはわかります。ここは、なにかしら、神聖な土地ですよ」
　杉の木の間の空を見上げて続けた。
「空気がやさしい。心が、やすらぎます」

024.

　女学校から帰っためるのは祖母のところへ、「ただいま帰りました」と、あいさつに行った。セーラー服のままだ。

　遠野は孫を眺め、時計を眺めた。「おや、もうそんな時間だったかい、まだ昼前だと思ってた」

「おばあさま、お昼ご飯召しあがってないの？」

　普段ならここで「わしゃ、昼食を忘れるほどボケちゃおらん！」「よかった！」といったやり取りが展開するのだが、今回は省略する。

「もう五時。夕方ですよ」

「……こんな時間までなにやってたんだい」

「お友だちとおしゃべりしてました。ああ、のどが渇いた。それより、保ノ助さんたち、無事着いたでしょうか」
　めるのは自分で茶道具を運んで、祖母と自分にお茶をいれた。

「ワダ宿には、とうに着いてるさ」

　そこはアシダ村までの、だいたい中間地点にあたる。ラウレンス氏はワダ宿で一泊する予定になっていた。

　保ノ助には一昨日、会った。シジミを届けてくれるよう、頼んであったのだ。彼はなんだかうわの空だった。「どうにも落ち着かなくってさ」、と照れくさそうに言うのだった。めるのは、ひとつ年下で、世慣れない保ノ助をあぶなっかしくみている自分に気がついていた。もしじぶんに弟というものがいたらこんな気持ちなのかしら……竜門渕家に生まれた人間にそれはあり得ないのだけれど。

「……ねえ、おばあさま」と声をかけると、本を読んでいた遠野は「んー」と気のない返事をした。しかしめるのが黙っているので、気になって顔をあげた。

「おばあさま」

「なんだい」

「私たちはどこから来たんでしょう」

「――なんだいやぶから棒に。通学路を説明せいって宿題かい？　めんどくさいねえ！」

「そうじゃなくて。私たち、竜門渕の祖先は、どこから来たのですか？」

「祖の女神はここに降り立った。それから私らは、ずっとここに住んどる」

「ですから……どこから」

「……そういうことになっとる」

「……」

遠野はため息をつき、老眼鏡をはずして閉じた本の上に置いた。

「めるのや、おまえ、いくつになった？」

「十五です、おばあさま」

「おまえが生まれた時、この娘こそ、わしの跡、竜門渕を継ぐ者であると、わしは直感した。それゆえ、親元から離し、この家で、わしの手で育ててきた。なあ、めるの」

「はい？」

「おまえには、竜門渕を継ぐ意思は、あろうか？」

「どういう意味ですか？　私ではおばあさまの跡を継ぐ力量がないと！？」

「力量なら十二分じゃ。単におまえの気持ちをきいておる」

「ございます」

「それなら、よろしい」

遠野はゆっくりと立ち上がり、奥の座敷へ入って行った。

025.

　おれの十四年の人生の中で。

　これほど好奇心旺盛な人を見たことがない。

　そういう意味のことが、保ノ助の脳裏を幾度も幾度も駆け巡った。まあ、家業を手伝って学校へ通ってという生活のなかで出会った人間を思い出してみて、の話。

　なにしろ、ラウレンス氏はよく立ち止まるのである。立ち止まっては道端に咲いている雑草の花に目を細め、道祖神の前で歓声をあげ、小鳥が鳴いているといって耳を澄ます。そしてそのたび、保ノ助に向かって、「コレは何という名か、アレは何という鳥か」と聞いてくる。

花の名前なんて興味ねーし、道祖神は道祖神だし、今鳴いてるのは誰でも知ってるぜ、ウグイスだ。

「ウグイス。名前もさえずりも、なんて……うるわしい！」、とひとしきり感激してから、「保ノ助には、珍しくもなんともないみたいですねえ。でも私は初めて聞きました。ヨーロッパのあちこちを旅しましたが、ウグイスはヨーロッパにいませんでした」
「へー。そーなんですか」
「そうなんですよ、ここにはヨーロッパにないものがたくさんあります。じつに、興味深い！」
　小鳥のさえずりに耳を傾けながら、道祖神をさらさらとスケッチし、さ、行きましょうか、とようやく一歩を踏み出す。立ち止まって絵を描いている外国人はさすがに珍しく、通りすがりの人々は一人残らず振り返って見ていく。
（なんだかさあ、恥ずかしいなあ）なんて、こっそり思ってしまう保ノ助である。

「ねえ保ノ助」
「はい？」
「きみは、大きくなったら、何になりたい？」
「え――大きくなったら？　親父の宿屋を継ぐくらい、かなあ」
「なにかを学びたいと、思わない？」
「学ぶ！？　学校！？　いやー、おれ頭わるいし。へへへ」
「保ノ助、学ぶのに頭の良し悪しは関係ありませんよ。必要なのは、パッションです」
「……ぱ？」
「日本語にすれば、情熱です」

　歩くうちに、水の音が聞こえてきた。「砥川（とがわ）ですね」
　街道は渓流のような砥川とつかず離れず、その上流に向かってアップダウンを繰り返しながらゆるゆると登っていく。街道といってもほとんど獣道である。

＊

「この街道は京都と江戸を繋ぐ道として徳川幕府が整え、中山道と名づけられて、もう三百年にもなります。けれどね……」

　ラウレンス氏は歩きながら手帳を開き、線を引きはじめた。ソラマメをひっくり返したような形とその右上に角の丸い四角、左下にも四角、その右隣に少し小さめの横長の四角。かんたんな日本列島の輪郭だ。巧みにペンを滑らせながら話は続く。

「……実はもっと前からあったのです。徳川幕府から遡ること、千年も前からね。そのころは中山道じゃなく、東山道という名で、京都と東北地方を繋いでいた……こんな具合に……」

「ほんとに！？　じゃ、千何百年も前から、この道を人が歩いてたってんですか！？　だっ、だけどっ、なんでこんな山ン中を！？　なんでもっと開けた、広いとこを歩かなかったんすか！？」

「この辺が都と東北地方を繋ぐ、内陸の重要な場所だったというのがひとつ。もうひとつは……砥川が水つ早湖に注ぎこんでるのは知ってますね。山の中では狭くて急な流れですが、湖に入るころには山はなく、ずっと広くて緩やかになってる。ね？　広く開けた場所では川の幅もとても広くなるんです。すると、広い川をどうやって渡るかという問題がでてくる。きみだったら、どうする？」

「そりゃあ――橋かけるとか、船で向こう岸に――」

「ですね。でも、川幅が広すぎて橋をかけられない、かけても、川が氾濫して壊れる、そのため、いっそ、船で海へ出てしまう、または、わざわざ川幅の狭い上流へ道を変えて東山道を、ということもあったようですよ」

「な、なるほどー、へー」
　道を逸れて握り飯と水で昼食。他愛のない会話のうちに保ノ助の気持ちも少しずつ、ほどけてきた。

　日本にやってきて間もないはずなのに。ラウレンス氏はいろんなことを知っていた。大人ってそういうもんか？　とも保ノ助は思ったが、うちの親父は家業のことしか頭になさそうだ。保ノ助がそんなことをあけっぴろげに口にすると、ラウレンス氏はからからと笑った。

「なぁに。私は不思議に思ったことに頭を突っ込まずにいられないんです。そういう性分なんですよ」

　登りが急になってくるとさすがのラウレンス氏も口数が少なくなる。木の橋の下で渓流があげる清冽な水しぶきにもちらと目をやっただけだ。

　もっとも彼は、あくる日星名千介氏に会うにあたり、どう自己紹介しようかと頭を悩ませていた。どうも、星名氏とはひじょうにプライドの高い人物らしいのだ。ならば絵描きと名乗るより、本職名を前面に出したほうがいいかもしれない……

　峠のてっぺんで風に吹かれながらひと息つき、すぐに出発する。ふたりとも、登りの山道はもうたくさんだという気持だった。
　ところが。道が下りになるとラウレンス氏はいきなり走り出した。今しがたまで虫の息だったはずなのに。保ノ助はあっけにとられてその後姿を見送るばかり。

「ちょ、ちょっと――せんせい――置いてけぼりなんて――ひでーよ、待ってくださいよ〜」

　ワダ宿で宿をとり、ようやく晩飯にありつく。
焼いた川魚、山菜と凍み豆腐の煮ものに野菜の浅漬けといった質素な献立だったが、保ノ助はあっという間に平らげ、ラウレンス氏は宿のおかみをつかまえ、例によって凍み豆腐について質問攻めであった。

　ラウレンス氏がせっせと手帳に書きこんでいる傍らで疲れた足を伸ばしていると、急激に眠気がおそってきた。夢の中で保ノ助は、この人を先生と呼んで後をついていく彼

自身を見たのだった。

せんせー

せんせー

待ってよせんせー

おれのこと、おいてかないでくださいよー

026.

　ワダ宿からアシダ村までは時間も距離も前日の半分。しかもほぼ平地である。前夜たっぷり休息をとったふたりは余裕の足取りでアシダ村に入った。

　さて、到着したものの、肝心の星名氏はどこにおられるのか。

　畑で鍬をふるっている農夫に声をかけて尋ねてみると、農夫は、「はて」と首を傾げた。そういえば、ここしばらく姿をみないという。

「星名先生んちはそこの川に沿って半里ばかり行ったところの、集落のはずれにあるんだが……仕事？　石の標本作ってるんだべ。うちんなか中、石ころだらけで、まあ、石に埋もれて食って寝て。へんな人だが、おらも子どものころは世話になったからな……」

　農夫は首筋に流れる汗を手ぬぐいでぬぐいながら言った。
　星名氏は、かつて小学校の校長だったのだという。子どもたちをよく学校の外へ連れ出し、野山を歩きまわり、川で遊ばせ、本人はでっかい声はりあげて歌を詠んでいたっけな、と農夫は遠い目をした。

「へたくそな歌でなあ！　みんなでばかにして笑ったなあ！　それが次の年には学校をやめちまって……あれは切なかった。みんな切ながった。星名先生、なんでやめるんだって詰め寄ったら、黙っておらたち子どもに頭さげてさ……あれは一生忘れられねえ……ああなんでこんなこと思い出しちまったや、星名先生な、家族おらんでひとりずまいなんだわ、旅にでも出てりゃ、訪ねて行ったところで無駄になる。役場に先生の友達の野村って人がいるから、そっちへ行って聞いてみたらどうだや？」

　そう勧められ、ラウレンス氏は連れを促して村役場へ向かった。

027.

　野村氏とは、アシダ村役場の出納係長で、短い頭髪を真ん中で丁寧に分け、鼻の下に四角いひげ、まん丸の度の強い眼鏡、白シャツに黒い袖カバーをつけた、絵に描いたようなお役人だった。

　星名千介の所在を尋ねると、野村係長は度の強い眼鏡の奥で目をしばたたき、ちょっと周囲を窺うように目を動かした。役場にはちょうど、もうひとり訪問者があって、土木課の窓口で「梅雨入り前に南の橋を補強してもらうはずだったが、まだか！　責任者を出せ！」と声を荒げている。野村係長は「ちょっと、こっちへ」と博士を役場の外へ連れ出した。

「え……と、星名に……あの、どんなご用件で？」

　保ノ助は、居場所だけ教えてくれりゃいいのにね、とラウレンス氏を見ると、彼も同じことを考えたらしい。小柄な野村係長を上からしばらく見おろしていたが、上品に笑みを浮かべた顔で言った。
「私は鉱物学者です。星名千介先生のご高名を伺い、ぜひとも先生と自然科学、地球化学、地球物理学について語り合いたいと思いましてね、アントワープで船に乗り、ジブラルタル海峡、地中海、スエズ運河、インド洋を経由、さらに太平洋を越えてきたのです」

　ラウレンス氏は次々とそれらしい言葉を繰り出し、保ノ助の頭をくらくらさせた。保ノ助はくらくらしていたが、野村係長はむずかしい顔で、うむ、と重々しくうなずいた

ので、役場の出納係って人はすげえ学があるんだなと感心した。それから急に声をひそめ、聞こえないような声で聞いてきた。「借金取り、ではありますまいな！？」

　ラウレンス氏はきょとんと保ノ助と顔を見合わせ、それからふるふると頭を振った。野村係長はそれを見て腰のうしろにぶら下げていた手ぬぐいを取り、額の汗を拭いた。「ほんとに、その、学術上のご訪問ということで？」と聞くので、

「そうです、私は掛け値なしに学者です。人にお金貸したりしません」と返す。「じつは竜門渕さんという方から星名先生はアシダ村にいるはずだから、と伺ってきたのです」

　野村係長の汗を拭く手が止まった。「なんだ、そうだったですか、あの方のところから。なら構いますまい。……星名くん、じつはここにはおらんのです」

　ラウレンス氏と保ノ助はさらに歩くために、野村係長に書いてもらった地図を手に、役場を後にした。星名千介はここにはいない。さらに一時間ほど小高い山を登ったところにある、療養所にいるのだった。

028.

療養所ということは、結核のようなむずかしい病気なのか、とラウレンス氏はおそるおそる尋ねた。

野村係長は、「うんにゃ」と頭をふった。星名氏は目を患い、その上、酒の飲みすぎで体を壊したのだった。ひとり身では仕事はおろか日常生活もままならないので無理矢理、入院させたのだという。
係長は簡単な地図を書き終えて、しばらく眺め、ためらいがちにラウレンス氏に手渡した。
「石ころに埋もれて野垂れ死にされるよりはマシかと、幼なじみの由で入院させてはみたものの……まあ、訪ねてみ。えらいひねくれ者でな、学者には会いたくない、というかもしれん」
口ぶりからすると、星名氏を療養所に入れるのにほとほと手を焼いたものらしい。それでも役所の玄関まで見送りに出た彼は、「泊まるところに困ったら、うちへ寄りなされ」と言ってくれた。

さほど交通の便のよくない山中の田舎だというのに、丘の中腹の療養所は薄青の壁色に白い窓枠と、なかなか小じゃれた外観をしていた。
この時代、不治の病であった呼吸器系の病気の療養のために、都会から空気のいい高原へやってくる人々がそこそこいるのだったのだ。初夏の白樺の林の中に建つ瀟洒な病棟はそういった患者たちを収め、しん、としていた。

受付で来意を告げる。竜門渕遠野氏と、ふもとの村役場の野村出納係長の名も出して。ラウレンス氏と保ノ助はかなりの時間、面会人用の待合室で待たされた。
保ノ助はそわそわと落ち着かなかった。ひょろひょろとやせっぽちで少々栄養不良の観のある保ノ助だったが、風邪で寝込むくらいのことはあったものの、医者にかかったこ

ともなければ病院などという所へ行ったこともなかった。しかも、名のある医学博士かなにかが作ったというこの療養所には、田舎育ちの保ノ助の知らない都会の雰囲気がそこはかとなく漂っていて、保ノ助を落ち着かなくさせていた。

　ラウレンス氏は、と見れば、彼は硬いイスに端正に座り、テーブル上の一輪挿しに差された野草の薄紫色の花を眺めている。どうせ、花びらが何枚だとかおしべやめしべがどんな形してるとかそんなこと考えてるんだろうな、と思っていると、氏は頭を傾け目を細め、
「道の傍、水辺、山の中、どこにでもこういう可愛らしい花を見つけることができる。信じられません。気候のせいでしょうが、このくには明らかにヨーロッパと違う。神々に愛されている、そんな気がしてきます」と、破顔した。

　それからおもむろに手帳を取り出してスケッチをはじめようとしたところへ、若い男の職員がやってきて、「ご案内します」と告げた。

３・「鉱物学者ラウレンス」
４・「奇人と呼ばれた男」へ続く

あとがき

中山道随一の難所と言われた和田峠。今では廃道になってる部分もあります。
幕末の皇女和宮将軍家降嫁の際にここを通ったわけですが（東海道を使わなかったのは当時の世情が非常に物騒だったから）普通に歩くのにも難儀しただろう山道を籠で？
調べてみると、男性僧侶が交代で皇女さまをおぶって峠を越えたのだそうです。僧侶さん、はげしく緊張しただろうし、つまづいて転んだりしなかったのかな？　想像しただけでハラハラしますね。
皇女さまはこの時14歳。結婚相手の徳川家茂との夫婦仲はとてもよかったのに、家茂、わずか五年後に病没。その後和宮ご本人も31歳の若さでお亡くなりに。公家と将軍家との政略結婚、また、時代からしてストレスはたいへんなものだったと思われまする…

2024年10月10日

奥付

オリカルクムの記憶

3・鉱物学者ラウレンス

2024年10月15日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　「月とサカナ」

「素材good」

制作　　Puboo

発行所　　デザインエッグ株式会社